



TITLE:

<批評・紹介>田村實造編 明代滿蒙
史研究

AUTHOR(S):

松村, 潤

CITATION:

松村, 潤. <批評・紹介>田村實造編 明代滿蒙史研究. 東洋史研究 1964,
23(1): 94-100

ISSUE DATE:

1964-06-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152657>

RIGHT:

批評・紹介

明代滿蒙史研究

田村實造 編

昭和三十八年十月 京都 京都大學文學部
A5 判 六六二頁 索引一五頁 圖版六葉

本書は、その副題に見える如く、さきに編纂刊行を終えられた明實錄抄「明代滿蒙史料」の研究篇にあたっている。しかしその内容は、史料篇の註釋といったものではなく、編纂にあたられた京都大學の明代滿蒙史料グループの研究成果の一部を收録したものである。しかしながらいづれも明代滿蒙史に關する重要課題の解明にあつた雄篇のみであつて、明代滿蒙史料の末尾を飾るにふさわしい論文集といえよう。

ところでこれらの諸論文について、そのすべてを論評することは、取扱われている問題があまりにも多岐にわたつており、それだけの専門の研究者に委ねねばならない。また筆者の關心をそそつた問題にしても、限られた紙数のなかでその全部に觸れることは困難であるので、本稿においては、とくに萩原淳平氏の「ダヤン・カンの研究」一篇のみをとりあげ、他の七氏の論攷については簡單なる紹介にとどめた。

明實錄が明代史研究の根本史料であることは論を俟たないが、現在一般にひろく利用されている江蘇國學圖書館傳抄本の影印本は、錯簡や脱落、誤寫が多くテキストとしてはきわめて不備であつた。

さいわいにこの度中華民國の中央研究院歷史語言研究所より、國立北平圖書館藏紅格本明實錄の影印に、同所の黃彰健氏らの詳細なる校勘記が附せられて、順次刊行されるに至つたことは、明代滿蒙史料の完成と併せて、今後の明代史研究の發展に寄與することがきわめて多大であると思われる。この時にあたつて間野潛龍氏の「明實錄の研究」と今西春秋氏の「明季三代起居注考」の兩篇が發表されたことは、まことに時宜を得たものといえよう。間野氏の論攷は、まず明實錄に關する從來の諸研究を擧げ、ついで明代十三朝の實錄について、それぞれの成立の事情を論述し、從來の諸説の誤謬を訂正されたものである。明實錄の如く數多くの傳抄本が存在する場合、その利用はなかなか困難であり、まず参照すべきものといえよう。また今西氏は實錄の編纂に際して、そのもっとも重要な資料の一つであつた起居注について、歷朝の起居注から説き起し、我が國傳存の明起居注に觸れ、ついで明季三代の起居注の内容を具體的事例をもつて實錄と比較し、その史料としての性格を述べ、今後の研究に指針を與えられている。

明代滿蒙史料の大半を占めている北虜の問題については、田村實造氏の「明代の北邊防衛體制」と寺田隆信氏の「開中法の展開」がある。田村氏は土木の變以後たてなおされた明の北邊防衛の中心をなしている九邊鎮について、それぞれの組織を詳述され、さらにオルドスがモンゴル族に占據されるに至つた顛末におよんでいる。寺田氏は北邊防衛の經濟的裏づけとも言うべき糧秣補給の問題を取扱つており、明代鹽法の通商法たる開中法の制度史としての側面、および邊餉問題解決にあたつて、その果たした實際的な役割を考察している。

明末におけるもつとも重要な問題の一つは、滿洲における建州女直の勃興であらう。これについては三田村泰助氏の「ムクン・タン制の研究―滿洲社會の基礎的構造としての―」と河内良弘氏の「建州女直社會構造の一考察」がある。三田村氏は滿文老檔太祖卷七十九以降に著録されている明廷から女直に與えられた勅書の表を克明に分析し、これによつて萬曆三十八年並後の太祖ヌルハチの支配下にあった建州すなわちマンジュ・グルンの統治機構の解明を試みている。論旨はきわめて明解であり、さきの同表に對する安部健夫氏の説を批判して餘すところがない。これにつづく發表が待たれる次第である。一方河内氏は李朝實錄を中心に朝鮮に對する滿洲からの逃亡奴隸の本質と女直社會の生産關係との考察をなし、十五世紀前半における建州衛社會の解明にあたっている。

佐藤長氏の「元末明初のチベット狀態」は、まずサキャパに代つて擡頭してくるバグモドゥバの變遷を通じて元末明初のチベットの狀態を説き、ついで洪武・永樂兩朝の對チベット政策におよんでいる。この間チベット側文獻と中國文獻の記述との基本的矛盾の解決にあたり、歴史事實の再構成を試みられている。

最後に萩原淳平氏の「ダヤン・カンの研究」について觸れよう。

この論文は同氏も述べられているように、ダヤン・ハガンに關する和田清博士の研究の批判から出發している。和田博士が蒙古中興の大可汗たるダヤン・ハガンをもつて、蒙古史料に見える Batu mǫngke すなわち明の記録に見える巴圖蒙克王に比定し、明實錄に小王子として活躍するものに他ならないことを指摘したことは著しいことである。またこの比定にもとづいてダヤン・ハガンの治世と四大事業について述べられたが、これに對し萩原氏は和田博士の

中國史料の取扱ひに誤謬があるとし、博士が小王子と明かに別人であるとした伯顏猛可王なる者こそ、通稱小王子といひ大元大可汗と自稱した人物であつて、ダヤン・ハガンにはかならず、その治世と事業も多大の修正が加えられねばならぬとした。ところで萩原氏は全く中國史料のみによつてダヤン・ハガンを論ぜられ、蒙古史料については他日を期せられたが、その論旨については蒙古史料によつて大幅の變更はあるまいとされている。しかしながらこれはさきの佐藤長氏の取扱われている明代チベット史の研究に見られる如く、また塞外史研究一般にも通ずる問題でもあるが、明代蒙古史の研究にあつても、當然和田博士がとられている如く、蒙古史料を中心とし、これと中國史料を對照して、兩者の記述の矛盾を解き補つて行く研究方法がとられなければならない。萩原氏の如く中國史料にのみ據つて歴史事實を再構成して、批判を行うことは、中國史料の性格から見て非常に多くの困難を含んでいるといえよう。したがつて本稿において、再び中國史料にもとづいて萩原氏の説を反駁しても、いたずらに水掛論に墮する恐れが多い。以下敢えて萩原氏の言及されなかつた蒙古史料を中心に論ずるのも以上の理由にほかならない。

第一に、Dayan qayan ≡ 小王子 Batu mǫngke か、小王子 ≡ 歹顏哈 Bayan mǫngke か、という問題をとりあげる。蒙古史料に據る限り、Batu mǫngke のみが Dayan qayan または Dayu qayan と呼ばれており、Bayan mǫngke は常に Batu mǫngke の父 Bolju jingong の名であり、Batu mǫngke の子または兄弟またはその近親に、Bolju jingong 以外の Bayan mǫngke と稱する者があつた形跡は全然ない。まして Batu mǫngke の後を嗣い

大可汗が Bayan mǎngke であったなどという傳えもない。ところで萩原氏は明實錄成化二十三年三月癸卯の條の「小王子已死」の記事にもとずき、これ以後の小王子を名山藏、吾學編、萬曆武功錄などの記事に従い、さらには弘治三・四年頃の北方民族の朝貢關係の記事から歸納的に結論ずけて伯顏猛可王に比定された。しかしハルハ・サイン・ノヤン部長シャンバ・ユルケ・ダイチンが康熙十六年に撰した Asarayci neretü teüke に據ると、Batu mǎngke dayan qayan の十一子中の季たる Geresan'ja jayavatu jayir-un gong tayji は正徳八年癸酉の生れとなっており、萩原氏の説によればこの時代は Bayan mǎngke の治世で、Batu mǎngke の歿後實に二十數年という奇妙なことになる。すなわちこれは正徳年間の可汗が未だ Batu mǎngke であった明證である。Geresan'ja は外ハルハ四部の祖で、著者シャンバの五世の祖にあたり、恐らく家譜に據つてこの年代を記したのであり、信を置くに足るものといえよう。なおこれと同じ傳えはシラ・トグジにもあり、ダヤン・ハガンを Batu mǎngke と Bayan mǎngke の二人に分けることは不可能である。

第二に、ダヤン・ハガンの歿年を正徳十四・五年とする點についてであるが、ダヤン・ハガンの絶對年代を傳えた蒙古史料には三つのそれぞれ異つた系統がある。萩原氏も「ダヤン・カンに關する蒙古史料批判」なる一章を設け補足的に觸れていられるので、少し詳しく述べてみよう。

(1) Altan tobči 順治十二年頃、國師ロブサンダンジンによつて撰せられたもので、北元の可汗の在位年代が滿都魯に至るまでは極めて明確に記されており、Manduyuli qayan は成化十一年乙未

に即位し、五年間在位の後、同十五年己亥に歿したとする點においては明の史料とよく一致している。こゝで Batu mǎngke bolqu jinong が位に即き、四年を経て同十八年壬寅にユンシユブ部人に弑されたと述べている。ところがこのつぎには、明らかに別系統の矛盾した史料によつて、Dayan qayan は「亥年 (cagai jid)」すなわち Manduyuli qayan の歿した成化十五年己亥に七歳で即位し、三十八年間在位して四十四歳で歿したと記し、歿年の干支を記さず、これ以後のチャハル可汗の年代の記し方は極めて不確かである。これはダヤン・ハガン以前と以後とでは原據の史料が違つていたことを示すもので、その年代の解釋は簡單に行かないが、思うにこれはダヤン・ハガンが滿都魯の後を直ちに承けて即位したという説と、そうではなく四年経つて父の死後即位したという説があったのを無造作に一緒にしたために、上記の如く一方では Bolqu jinong が亥年に即位して四年在位したと言いながら、他方ではダヤン・ハガンも亥年に即位したというような自家撞着を來したに過ぎない。成化十五年即位説は、同年に歿した Manduyuli qayan の寡婦 Mandugai qatun とダヤン・ハガンが婚して大統を嗣いだことから起つたに過ぎないので、その三十八年在位というのはこの説とは別に、成化十八年即位説の系統に屬するものと思われる。とすれば成化十八年に七歳の可汗が四十四歳で歿したのは正徳十四年己卯となり、一見萩原説の歿年と一致するようであるが、實は後に述べる Geresan'ja の年代からみて正しくないのである。要するにこの説は、ダヤン・ハガンは申年に生れ、寅年に即位し、卯年に歿したという傳承から算出されたものである。この Altan tobči の系統に屬する史書には Asarayci neretü teüke 普通に黄金史として知

られる *Qurıyanguı alıan tobči* (略本アルタン・トブチ) がある。

(2) *Erdeni-yin tobči* すなわち蒙古源流で康熙元年オルドス・ウーシン部長サガン・セチュン・ホントアイジによって撰せられたもので、これでは *Manduyulun qayan* の治世を誤って十二年繰り上げて天順七年癸未即位、成化三年丁亥歿とし、つぎに *Bolun jinong* が即位したと言わないが、翌成化四年戊子から三年経って成化六年庚寅に害され、同年中にその子 *Batu mönge dayan qayan* が即位したとする。この十二年ずつのずれの原因は、源流の著者はダヤン・ハガンの生年が正しく天順八年甲申であったことを知っており、一方には七歳で即位したとの傳承を重視した結果、天順八年から數えて七年目の寅年に即位の年を當てたからで、これも *Altan tobči* の原據と同じく申年誕生、寅年即位説に屬する。また七十四年間在位して八十歳の嘉靖二十二年癸卯に歿したとするから、やはり卯年逝去説である。そして嘉靖二十二年が遅すぎることは和田博士が論證されている如くであり、異存のないところであろう。この系統の紀年は、康熙四十年頃に成ったかと思われる *Jalavus-un qurim* その増補本たる *Sira turjuı* 雍正十三年に正藍旗蒙古都統ロミの撰した *Mongıol borjıd obor-un teike* (蒙古世系譜) に採用されている。

(3) *Gangga-yin urusgal* 雍正三年ウジュームチン部長 *Qayan babai* の子コンボジャの撰になるが、これに據れば *Manduyuli qayan* は天順三年己卯に即位し、四年を経て同七年癸未に歿し、*Bayan mönge bolun jinong* は同年に即位して四年を経て成化二年丙戌に弒せられ、翌年すなわち成化三年丁亥に *Batu mönge*

sayın dayan qayan が七歳で立ち、三十八年を経て四十四歳の弘治十七年甲子に歿したとする。この説は滿都魯可汗の在位年數を四年すなわち足掛け五年とする點では事實と一致するが、絕對年代は十六年も早い方にずれている。これは滿都魯の在位が五年、*Bolun jinong* の在位が四年とのみ傳えられて干支を記さなかった史料と、アルタン・トブチのようにダヤン・ハガンの即位が滿都魯の歿した成化十五年己亥とした史料とにもとずき、しかも後者の「亥年」の意味を誤解して實際よりは十二年早い成化三年丁亥に當てたところからくるので、ダヤン・ハガンの在位を三十八年間とするのはアルタン・トブチと一致し、これは「申年誕生、寅年即位、卯年殂落」説の系統に屬する。この説を採るのは乾隆四年にジャルト部のシレゲト國師ダルマまたはチョイジジャムツォの撰した *Altan kündün mingyan gegesütü biäg* 乾隆四十年に成ったバーリン部のラシブンスカの *Bolor erike* である。

以上のダヤン・ハガンの紀年に關する蒙古所傳を整理すると、本來は、(一)成化十五年己亥に *Manduyul (Manduyuli, Manduyulin) qayan* が歿すると直ちにその寡婦と婚して大統を嗣いだとするもの、(二)申年に生れ、寅年に即位し、卯年に歿したとするもの、という二通りの紀年があったようである。そしてこの二説を調和させて絕對年代を決定しようとした結果、上記の三つの解釋が生じ、いずれも無理を含む結果となったものであろう。それ故これをあらためて解釋してみると、その生年の申年は源流には天順八年甲申としているが、これはその子孫の年代からしてきわめて妥當である。すなわちその長子 *Törö bolad* 次子 *Ulus bolad* は成化十八年壬寅の生れで、ダヤン・ハガン十九歳の時に當り、その子 *Törö*

bolad は弘治十七年甲子、二十三歳で Bodi alay gavan を生み、Bodi alay gavan は四十四歳で嘉靖二十六年丁未に歿している。またダヤン・ハガンの第三子 Barsubolad は成化二十年甲辰に生れ、二十三歳で正徳元年丙寅に Gün bilig mergen jinong を生んだ。吉囊の名が明實録に始めて現われるのは嘉靖十二年二月癸卯の條が最初で、この頃成人して活躍を始めたものと思えるが、この時は二十八歳で丁度妥當である。また Gün bilig の名が套酋の代表として現われるのは、この時はすでに父の Barsubolad の死後であることを暗示する故、源流が Barsubolad の歿年を嘉靖十年辛卯に置くのは信用出来よう。このような子孫の在世年代からみて、ダヤン・ハガンの生年を天順八年甲申に置く源流の説に反対すべき理由はない。してみれば(一)に従って即位が成化十五年己亥とすれば、この時十六歳で丁度成年に達した頃であり、また(二)に従って寅年であったとすれば、滿都魯可汗の寡婦と結婚したのは遅くとも長子および次子の誕生の年たる成化十八年壬寅より後ではあり得ないから、寅年は成化十八年を指すことは明らかで、他に當てようはなく、この時十九歳であったことになる。七歳即位は申から寅までの最短の場合が七年であるのによって發生した考えで、説話にありがちな誇張とみてさしつかえあるまい。問題はそこで歿年の卯年がどの卯年であるかで、まず在位三十八年の卯年とすれば、正徳十四年己卯であるが、これでは早すぎる理由がある。それは先にふれた Geresanja のことであり、彼の生年は正徳八年癸酉であり、Aasarçi neretü teike および Sira turjuji に據ると、彼がハルハに封ぜられた由來は、ハルハ・チノス部の Nutabolad がダヤン・ハガンに請い、ジャライルやケルトの Sigcin 等の壓制か

ら免れるためにこの皇子を主として迎えたのだとあり、ハルハに赴いてから娶った Qatunggai 太后に長子アシンハイが生れたのが十八歳の嘉靖九年庚寅のことであったということである。蒙古の習慣では子が十六歳から十八歳位になると結婚して分家するのが通例で、ダヤン・ハガンの諸子として例外ではなかったであろうし、まして新たに勢力下に入った部族に未成年の子を封ずるのは常識では考えられないから、Geresanja が父のダヤン・ハガンからジャライルの地に封ぜられたのは、やはり嘉靖九年頃であったと見てよいと思われる。そして Geresanja の支配した部族は十三あり、嘉靖二十七年に彼が歿した後、その七子はそれぞれ二部族ずつを相續したが、季子 Samu buyima だけは Uriyanggan 部のみを受けたといわれる。一體 Uriyanggan はまたハルハの異稱でもあったらしく、現に Gange-yin urusgal は外ハルハを Uriyanggan と汎稱して、その世系を敘している。こうしてみると嘉靖年間に Geresanja がハルハに封ぜられたのが、傳えられるダヤン・ハガンのウリヤンハイ討滅事業と密接な關係があり、恐らくこの亡びた萬戸の故地に Geresanja を置いて統治させたのであろう。源流に據れば、右翼三萬戸は Barsubolad jinong に率いられてウリヤンハイ部の討伐に参加したとあるが、もしこれがダヤン・ハガンの歿後の出來事であったとすれば、Uriyanggan の故地にはダヤン・ハガンの少子などではなく、吉囊、俺答の諸弟が封ぜられるのが自然と思われる。いずれにせよ、嘉靖八年頃にはダヤン・ハガンはまだ健在であり、烏梁海萬戸の討滅も、その生前の事業であったと見ておくのが、もつとも無理がない。とすれば正徳十四年己卯の殂落説が成りたたないことは明らかであろう。

こぎに源流の嘉靖二十二年癸卯説であるが、これが成りたないことは、和田博士の證明せられている如くであり、したがって殘る可能性は、その中間の嘉靖十年辛卯だけとなる。この年は前述の *Geresanja* の年代からみて無理がないばかりでなく、源流によるとダヤン・ハガンの長子 *Toto bolad* は父の生存中に嘉靖二年癸未に歿したとあり、その長子 *Bodi alay* が祖父の歿後大位を嗣いだとなる。ところが源流とそれを承けた諸書以外の蒙古の史料は一致してダヤン・ハガンと *Bodi alay qayan* の間に一時 *Barsu bolad sayin alay jünong* が纂立した時期があったことを傳えており、しかも源流によれば *Barsu bolad* の歿年は嘉靖十年辛卯であるから、ダヤン・ハガンの殂落は遅くともこの年中のことであればならない。ところで *Gangga-yin urusgal* *Altan kündün minggan gegesitü bitig* *Bolor enike* は皆 *Barsu bolad* の在位は僅か一月で歿したと傳えている。してみればダヤン・ハガンの殂落は嘉靖十年辛卯中に起り、強盛な右翼ジノンが二十八歳の嫡孫 *Bodi alay* を押し措いて大位を奪い、やがて同年中に左翼の勢力を背景とした *Bodi alay* が反撃に出るとジノンは退位したか、敗死したかしたのであろう。すなわち結論として、達延汗の在位は和田博士の述べられている如くであり、成化十八年に即位したとすれば嘉靖十年までの五十年間、成化十五年とすれば五十三年間となるのである。享年も六十八歳で別に無理はない。

第三は、達延汗の四大事業についてであるが、その第一の亦思馬因撃破である。亦思馬因が成化二十二年に死んだことは、明實錄の同年七月壬申の條に據るのであるが、この年は *Batu möngke dayan qayan* の二十三歳の時であるから、ハガンが直接手を下し

たのではなく、源流に據れば *Toorlas* の *Toqoči sigüsü* (少師) すなわち朵顏の脱火赤をして討伐に當らしめ、*Toqoči* は先に亦思馬因に奪われたダヤン・ハガンの生母 *Sikir* 太后を得てハガンのもとに致して母子を再會せしめたと明記してある。ダヤン・ハガンが直接手を下したものではないが、ハガンの在位中にその意を帶して行われた征戦であり、ハガンの事業に算えてよからう。第二の瓦剌撃破であるが、明人が蒙古の事情に無知なのは當然で、瓦剌との衝突もいずれ明邊を遠く離れたところで起った事件に違いないから、明の記録に見えないのも驚くに當らない。事實明人が蒙古の内情を知悉するに至った俺荅の順義王受封以後でさえ、俺荅の瓦剌遠征のことは曖昧模糊とした風聞しか傳わっていないのである。第三の右翼鎮壓は問題がない。第四の烏梁海萬戸の討滅についても、この征討がダヤン・ハガンの手によって嘉靖年間に行われたことは先述した通りである。

最後に結論として、もう一度繰り返すと、(a) 蒙古史料に據る限り、*Batu möngke dayan qayan* の後に *Bayan möngke* が立ったという事實は認められない。(b) *Batu möngke* が成化二十三年に死んだという明人の解釋は、それよりずっと後の正徳八年に *Batu möngke dayan qayan* の子 *Geresanja* が生れているから誤りとせねばならない。(c) *Batu möngke* が天順八年に生れたことは子孫の年代から見て確實である。(d) 即位は成化十五年、十八年の兩様の傳えがあり、前者は *Mandurpul qayan* の、後者は父 *Bayan möngke bolqu jünong* の歿年に當る。(e) *Batu möngke dayan qayan* が *Uiyangan* を平定して、その故地に *Geresanja* を封じたのは、*Geresanja* が成年に達した嘉靖八年頃でなければなら

ず、したがってその頃まだダヤン・ハガンは在世中であつた。(f) また父の在世中に歿した長子 *Turid Bolad* の死は嘉靖二年であつて、勿論このこともダヤン・ハガンの治世が嘉靖中におよんだことを示している。(g) ダヤン・ハガンの死後、一時大位を篡つた *Barsu bolad Jinnag* は嘉靖十年に歿したと伝えられ、この年代は嘉靖十二年から明實錄に、その子吉囊の名が見え始めることで傍證される。(h) したがってダヤン・ハガンの歿年が卯年であつたという傳承は、この嘉靖十年を指すものとしなければならぬ。(i) 蒙古史料には、*Barsu bolad* は篡位後一月にして歿したと伝え、嘉靖十年にダヤン・ハガンと、その子 *Barsu bolad* が相ついで死んだらしい。(j) 四大事業なるものも、同様にして否認され得ない。

以上萩原氏の和田博士に對する批判に再批判を試みたのであるが、ダヤン・ハガンについては、現在西獨のボンに留學中の岡田英弘氏が鋭意研究されており、本稿においても同氏の研究ならびに敦示によるところが多である。なおいづれ發表せられる岡田氏の論攷において、さらに詳細に説明せられることと思われるが、その骨子はここに傳へ得たものと信ずる。また仄聞するところでは、去る一月ニューデリーで開催せられた國際東洋學者會議に出席した外蒙古の代表が昨年偶然内蒙古呼和浩特の圖書館に、*Altan sagan gavan-u namtar* と題する俺答の傳記が発見され、その内容の豊富さは一驚に値し、目下ウランバートルにおいて外蒙の學者が出版の準備に掛っている由である。ともかくこれによつて數年來外蒙で編纂中であつた三卷本の蒙古通史の明代の部分をすべて書き改めねばならぬということであり、恐らくこれによつて俺答の祖父達延汗の問題も明らかにせられるのではないかと思われる。(松村 潤)

中國古歲時記の研究

守屋美都雄 著

昭和三十九年三月 帝國書院
A5判 四九三頁

中國人の生活史を研究する上に、その年中行事の資料が重要であることは改めて指摘するまでもない。年中行事の歴史はただに中國についていろいろばかりでなく、いづれの國民に對してもその悠久な過去を學びとるよすがとなるのである。斷片的に残された資料を集め、正しい分析や綜合を加えると、そこから彼等が自然に對して如何に順應し、その時々如何なる悦樂を持ち願望や慰安をえたかということが明かにせられる。王侯貴族庶民あるいは地方と都市、南方と北方といった地域性、それらは複雑してはいるが、源流を溯つてゆくと固有なもの、外來のもの、あるいは農耕や狩獵などの原始的社會の本來の姿がおのずから復原されてくる。過去の傳統を求めて現在あるものと取組む採訪民俗學は比較民俗學とともにこの分野における主位に立つ研究手段ではあるが、文獻と對決する歴史學的方法もまた無視しえないものがあり、これらは兩々相補うべく、ことに歴史的な資料の豊富な中國に對してその感が深い。しかし守屋博士の立場はこうした民俗學者としての態度ではなく、實は「中國の歴史を眞に理解するため」の手段として、先ず「家族の歴史的變遷を理解する必要がある、そのためにはただ支配者達が自分のために書き残したような御役所の文獻では事足らない」とされ、かくて着目したのが古歲時記の類だといふのである。そしてその中からとくに採上げたのは梁の宗懷が著した「荊楚歲時記」であつ